Ｖｉｔａｌｉｔé インタビュー

国際金融マンから神父へ転身

谷口　幸紀

聞き手：佐多 保彦　株式会社東機貿 代表取締役社長

佐多：今年4月にローマ法王（ヨハネ・パウロ二世）がイスラエルのガリラヤ湖畔で10万人の野外ミサを行われたと、読売新聞の記事（2000年4月21日付）が詳しく伝えています。それによると、このミサは「新求道共同体」（注参照。以下「共同体」と略）という運動のメンバーが設営し、大多数の参加者もこのメンバーであった様ですね。このミサの実現の中心にはキコ・アルゲリヨというスペイン人の一信徒がいて、ギターを抱え、自作の聖歌を歌い、しかも司教たちがたくさんおられるところで、説教をされたとのことです。このキコという人物は日本ではまだ全く知られていませんが、谷口さんを留学へとローマに送り出してくれたのは、この「共同体」と伺っていますが……。

谷口：キコは、聖職者ではなくただの一信徒ですが、エネルギーにあふれ、スピリッツとカリスマ性も兼ね備え、自作の聖歌を歌いながら、この共同体の推進役となっています。それは、1970年代に新左翼運動が盛んだった頃に、形骸化した信仰を問い直そうとする若者たちから始まった運動です。教会が形だけのものとなり、実際の救済の場になっていないとの問題意識から、ローマに「共同体」の神学校をつくりました。今では、この共同体には100カ国以上で100万人を超す参加者があります。キコの人柄には8年間、ローマにいる間に身近に接してきましたが、私と同い年の60才です。彼こそ、800年前のアシジの聖フランシスコ以来久々の新しい大型聖人になる可能性を秘めていると、私は考えています。キコについて書かれた日本語の本はまだありませんので、いつか紹介の本をと、希望しています。

佐多：日本では、カトリックの神父やシスターをめざす人々が、ここ20年位極端に少なくなってきていると聞いています。豊かな世の中になったので仕様がないとは大勢の意見の様ですが、果してそう簡単に言えるのでしょうか？

豊かになって、かえってお金や仕事そしてレジャーにと追いまくられる生活にむなしさを覚え、もっとスピリチュアルな生き方に興味を持つ人たちは、老若男女を問わず、逆に増えてくる様な気もするのですが。現在、我国の青少年といわず、あらゆる層にみえる「イジメ」や常識では解らない惨劇を理解し、改善するカギは、ここにあるのではないでしょうか。90年代初期に『清貧の思想』という本が我国で爆発的に売れたことの底流に流れる日本人の持つ精神性の清流に気づき、そしてこの流れに乗るという生き方がもっと出て来る様に思うのです。

谷口：今のカトリック教会は、後継者が不足しています。今ある路線は魅力に乏しく、神父になろうという人が入ってこなくなったのです。ひとびとが、見切りを付けているのです。現在のままを、そのまま引き継ぐのではダメだと思います。例えば、ミッション・スクールでさえ、信仰教育を自信を持ってやっていない。受験の進学校やお嬢さん学校になってしまっています。私の母校もミッション・スクールでしたが、校長が「ここは人格教育を行う所である。東大に入れりたければ、近くの灘高に行ってください」と言い切っていました。この世の出世志向やエリート志向の価値観と、信仰の価値観は、異なっているので、相容れないのです。

佐多：個人として、経済的な安定、あるいは、あるレベル以上の社会的ステータスをめざすと共に、同時に、精神的に高いものを求め、信仰にも篤い人になることは、それほど難しいことでしょうか？ 聖書の『シラ書』の「富について」の所には「富がもとで身を滅ぼす危険は大いにあるが、富の誘惑に打ち勝ち、会衆に施しをしながら、清廉潔白に生きる金持ちは幸いである」とありますが。

谷口： 富や栄誉と、信仰の両方をめざすことは、矛盾はしてはいませんが、普通の人は、どちらかに片寄ってしまうものです。神の国を二の次にして、この世の価値を求めてきた人は、なかなか神様に出会えない。しかし、信仰の種を失わなかった人は、一時世俗の世界にまみれても、又神の国へ戻れるのです。キコの場合は、普通の人ですが、俗世界のものすべてをすてて、神様につかえています。

佐多：日本の医学は、延命にかけては抜群の成績をあげ、日本人の寿命は、この50年で飛躍的に延びて、昔45歳だったものが今や

谷口 幸紀 / たにぐち・こうき

1939年、大阪で生れる。熱心なプロテスタントの母親の影響で中学生2年の時、洗礼を受ける。キリスト教系の六甲学院中学・高校に通う。上智大学文学部哲学科に入学。同大学院に進み、中世哲学研究室の助手になる。69年、30歳の時、学園紛争が原因で、国際金融バンカーの道を歩み出すこととなる。いくつかの外資系銀行にスカウトされ、ドイツ、イギリス、アメリカで、外債発行の業務に奔走。しかし、世話をしていた妹の病気回復を機に、85年、46歳にして、高収入のエリート・ビジネスマンを止めて、すべてを捨て、神だけの道へ入る。半年間、東京・山谷で日雇い暮らし。89年、49歳で本場バチカンのあるローマの神学校へ留学。司祭となって、8年後に帰国。98年より、四国高松の神学校の担当として、新校舎建設のための準備活動で忙しい。異色の経歴の神父として、新聞、雑誌に、たびたび報道、紹介されている。

（注）新求道共同体（Neocatechumenal Community、ネオカテクメナル・コミュニティー）とは、スペイン人キコがマドリードで始めた草の根的運動で、名称は古代ローマの迫害時代に存在した「求道共同体」から採られたもの。カトリックに従順で、その枠内で、原始キリスト教に回帰しようとする動きと言える。

80歳に達しています。しかし、その延命した分、日本人の精神性は、果してどうなったのでしょうか?

谷口：とても難しい問題ですね。例えば宗教的に考えて、キリスト教に救いを求めるというか、精神性の根源を希求しても、古いキリスト教は、今日、空洞化しています。そのため、こころの渇きを癒す場を求める現代の人たちのこころを、理解できない。だから、人々は古い教会の中にはその場が無いことを感じて、新しい場所を求めているようです。

「共同体」は、ガリラヤ湖畔の「山上の垂訓の丘」上に、新たに研究・会議・宿泊の大きな施設を建てましたが、これはキコの努力が実を結んで、イスラエル政府も、実に驚くべきことなのですが、キリスト教にとって意義深い場所に例外的に建設を認めたものです。今年4月、ローマ法王は、この地を訪れ、10万人野外ミサに先立って、この施設の落成祝別式を執り行われました。

佐多：日本には、日本の風土にあったキリスト教を、という、いわゆるインカルチュレーション（キリスト教の文化内開化）の問題については、どうでしょうか？遠藤周作氏は、『沈黙』の本当の主人公が、ロドリゴ神父ではなく、キチジローであると言われ、はた又、キチジローはクリスチャンか否かの境目でふらふらと行ったり来たりしている頼りない人間として描いておられます。それが実は、あたかも遠藤氏自身あるいは日本人としてのクリスチャンのあり方のモデルでもあるようですね。

谷口：日本は、キリシタン時代に一度はファースト・ラブの情熱でキリスト教を受け入れました。しかし、迫害と鎖国の歴史を通過した後の日本人の心には、離別した相手に対するような屈折したものがあって難しいですね。ヨーロッパの場合も、身近に、教会など伝統的なキリスト教の建物が数多く残っているのに、歴史の手垢に汚れて形骸化した教えでは、人々の心は癒されていないようです。

佐多：谷口さんが経験された国際金融の世界はまさにグローバル・スタンダードで動いている世界ですから、お分かりと思いますが、日本人は、いわゆる経済・社会面でいやおうなく「普遍性」を理解する必要に迫られだしました。カトリックという言葉は「普遍」という意味だそうですが、どう解釈したらよろしいでしょうか？

谷口：21世紀は、宗教間の「対話と相互理解」がますます進むと思います。今までは宗教がからむと、戦争がドロ沼化したりしましたが、これからは、盲目的なドグマにとらわれることから離れて、科学的に、学問的に宗教を扱うようになるでしょう。今年の夏、野尻湖での経験で感激したのは、プロテスタントの3教派の牧師さんが、英語で一緒に信仰告白をしましたが、カトリックと全く同じ「語句」を用いていました。一致するベースが、既に、ちゃんと在るのです。

佐多：今後、谷口さんのように、中年を過ぎた人々で、神学校に入ってくるひとたちが増えてくる可能性は、如何でしょうか?谷口さんは、46歳の時銀行をやめられ、49歳でローマへ行って、神父になられましたが、遅くはなかったですか。

谷口：神学校に入った時は最年長でしたが、神父になった時には、さらに私より年寄りも入ってきました。決して、遅いということはない、と思います。世界的にも、社会人としての経験を充分にふんで、40代を越えて神学校に入ってくる人は、多いのです。また、受け入れる神学校の体制も、できつつあります。今は世界的に司祭が足りないのです。興味のある方は、是非私にご連絡を下さい!

佐多：最後に、日本のキリスト教は、50年後、100年後には、どうなっていると思われますか。

谷口：そうですね、形からすると、教会のオルガンから、キコのギターにとり変わるようなことは、大いにありえますね。あるいは内面的には（既にその動きは活発になってきているのですが）何らかの形で、禅の修行など東洋の瞑想のあり方が、カトリックの中にどう取り込まれていくのか、興味津々のところでもあります。